

従来型の実証研究からの脱却：アートベース・リサーチへの期待

鈴木，隆子
九州大学大学院言語文化研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/7318911>

出版情報：言語文化論究. 53, pp.73-81, 2024-11-05. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



従来型の実証研究からの脱却 ——アートベース・リサーチへの期待——

鈴木 隆 子

1. はじめに

私が国際開発に関わり始めて、四半世紀が経とうとしている。学者の主な仕事は、研究調査をしたり、それを論文にまとめて出版したり、学会で報告発表したりすることだ。大学では、学術的に権威のある雑誌に掲載された論文数や被引用数で、業績が評価される。

私の専門は、国際開発学あるいは国際教育協力論である。持続可能な社会を目指して、貧困層や少数民族など、どちらかという社会的弱者の多い、農村や僻地において、基礎教育の質の向上に心を砕いている。これまでミャンマー、ネパール、ザンビア、コロンビア、ニューカレドニア等で、比較的長いスパンで社会調査を行い、実証研究に尽力してきた。

しかし、年々、そのモチベーションが低くなっている。なぜなら、いくら研究を重ねて、論文を執筆しても、それが社会に貢献しているという実感が持てないからである。もしかしたら、大学に着任する前、政府や民間企業で勤務していた経験を持つからかもしれない。前職のJICAで実施した調査は、技術プロジェクトになったり、ザンビア政府の政策になったりした。民間企業では、たとえ会社の1コマとしてであっても、努力は回り回って顧客を喜ばせ、その結果、それは企業の収益に繋がった。

大学の研究はどうだろう。社会変容への貢献の実感はない。無論、私の非力や無能さに依るところは大きい。著名な先生は、いくらでもいらっしゃる。特許を取ったり、はたまた大きな賞を受賞されたりと、ご活躍が著しい先生も多数いらっしゃるだろう。だが一方で、周りの先生たちを見渡してみても、調査研究が国の社会政策に反映されることは、ごく稀だ。論文も、同業者や大学院生などの、学術関係者には読まれていても、一般社会のどれだけの人が、学術論文に目を通しているだろう。そう考えると、無力感をぬぐい去ることはできない。

そんな時、「社会構成主義」や「アートベース・リサーチ」の概念に出会った。きっかけは、2021年に「途上国の学びを拓く」に一章を分担させていただいた時に遡る。「対話で生み出す教育開発の可能性」と題うった本著は、編著者が「国際協力の形はこれで良いのだろうか」と自分たちの活動を常に批判的に捉えながら、途上国の人たちと正面から向き合い、協働していくプロセスそのものが教育開発である」という信念の下、「対話」をキーワードにつくられた本である（久保田、p4, 2021）。

社会学者の岡原（2014）は、社会学という学問が、ただ論文や書籍として放置されるだけなら、それは死物化しているのではないかと問題定義を投げかけている。そして、書物を介した関係性では、「対話」を見出すことは難しいと述べている。しかし、社会学が「対話」をベースにしている限り、生きた社会学になると、断言している。

私が目指すのは、生きた学問である。このような、プロセスにおける「対話」であり、生きられつつある「経験」である。死物化した亡骸を積み重ねることではない。確かに伝統的な価値観は行き詰まり、脱構築から再構築へ、新しい一步を踏み出す段階なのだろう（ガーゲン、2004）。それを示すように、この考え方は多方面で賛同され、社会学、哲学、心理学、教育学と多分野で広く適用されている（大下他、2014；原、2011；ガーゲン、2023）

しかし、一方で、それは主観的ではないのか。バイアスが入るのではないのか、という懸念が浮かんでくる。質的調査を主な手法とする私であるが、ライフヒストリーや、ナラティブ・アナリシスといった、比較的主観的な社会調査法をとる場合でも、なるべく客観化することを追求してきた。研究者個人のバイアスが入ることなど、もっての外だ。このような、社会科学の科学性や客観性と、「対話」や「経験」を主体にする極めて個人的な手法は、両立するのだろうか。ましてや「パフォーマンス・リサーチ」は、學術の枠を超えて、音楽や小説などの芸術の形で、社会を変容しようとすると言う。そんな主観的な媒体によって、社会を科学することはできるのだろうか。このような疑問に答えるため、本論は、社会構成主義を主体とした、介護民俗学やアートベース・リサーチなどの先行実践を考察し、議論と理解を深めることを目的とする。

2. 社会構成主義

長らく伝統的に社会を支配してきた「本質主義」は、社会には不変的な本質が存在すると考える。そこから派生する社会の全ての分類は、その本質を基準として判断された。それによって決定された境界から成る独立した単位によって、世界は構成されている（ガーゲン、2023）。その境界によって作り出された概念に基づき、「本来あるべき姿」という価値観をもたらす。これに対して、「構築主義」はそれを批判する議論として生まれ、「ポストモダニズム」は、境界そのものを否定した。これは、ロンドン大学の博士課程に入学した時、教育学者になろうたる者の必須科目として、真っ先に習ったことだ。

伝統と批判が対立する長い議論の末、ガーゲン（2004）は、両者を融和する「対話」が未来のための新たな可能性になりうると結論づけた。言葉は社会的実践であり、対話は社会構成主義のカギとなると説く。対話には、理解を促すだけではなく、変化を生み出す力があると言う。

通常、意見の不一致がある場合、人はルールで「合理的な形式化」をして対応しようとする。議論、交渉、取引、調停の実施によって、一つの合意に導くことで不一致という問題を解決する、いわば強制的なトップダウンのやり方である。それを緩和する手法として、あらゆる意見を公平に受け入れ、生成的な対話を重ねることで、同意に至るはずだという「対話の倫理」がある。しかし、忍耐強い対話の後で人々が必ず同意に達するという信念は、現実的ではないと彼は言う。

それに対してガーゲン（2004）が提唱するのは、「変化力をもつ対話」である。人々は各人、様々な対立し合う現実、それぞれ格闘している。だから、一つ一つの個人的体験を検証して、社会変化への手がかりとなるような会話や行動を見つけていけば、実践のレパートリーを構築することができる、と説いている。無論、一つの事例が、全ての対立や差異に有効というわけではないが、この実践を抽象化することができれば、他の場面でどうすればいいかを考えるヒントになる。表にあるレトリックからではわからない、裏にある個人的な事情や体験を知ることによって得られる個人の多声性は、お互いの理解を深め、誤解を解消する助けになる。

3. 関係性から考えるものの見方

さて、対話を考える場合、原子学的な境界があるという前提で自分たちのことを捉えたと、自律した個人、あるいはその集まりの独立した集団は、分離する。その結果、自己に焦点を当てることとなり、他己との比較が生じる。そうすると、自尊心は自分の優位性を正当化しようとし、そこから対立、敵意、疎外、搾取が生まれる。このような境界による分離と、そこから生じる利己主義から脱却するため、ガーゲン（2023）は「関係」、つまり結びつきを重視すべきだとする。

彼は、一般的な現実だとか合理的だとか善だとか正義だとか、そういった伝統の源は、関係のプロセスから見出されると述べている。即ち全ての物は、関係性によって、意味が変わるからだという。まず個人が存在し、それが人間関係を形成するというのは常識だ。しかし、彼はそれとは逆に、最初に関係のプロセスがあり、そこから人間が生まれるのだとする。人は変幻自由な存在で、周囲との関係の中で、形成されていく。私たちは、関係のプロセスに浸かりながら、日々生きている。各人が、取り巻く関係の中で、学び、理解し、調整し、価値判断し、それぞれのアイデンティティと特徴を確立していく。つまり我々は、独立して決断を選び抜いているのではなく、世界を共創するプロセスを日々重ねているのだ。だから、我々は「関係」を重視しなければならない。そして何より大切なことは、生き方が関係のプロセスに依存しているかどうかではなく、関係のプロセスが、ウェルビーイングを高めているかどうかだと締めくくっている。

4. 介護民俗学

医療や衛生は、心身共に人の健康に大きく関わるので、ウェルビーイングを考える上で、大変重要な分野の一つである。超高齢社会を迎えている日本では、その役割はいっそう大きいものかもしれない。医療分野における「関係のプロセス」は、分離が前提で、ヘルスケアを提供する者と、受ける側は、境界によって隔てられた、独立した存在とみなされており、しかもこの関係は、下人と結果の因果関係で成り立っている（ガーゲン、2023）。医療行為者は、機械のように標準化されたマニュアルに従って治療に専念する。患者は、物扱いされ、話を聞いてもらえないため、尊重されていない、あるいは十分な情報を与えられていないと感じる。自身の病院における体験からも、昨年父を看取った際の経験からも、それは実感する。つまり、医師は治療を行うことで患者を治す。患者はそれを受け入れる者として、その関係は一方的かつ道具的だ（ibid）。

このような疎外的な現状から生まれたのが、ナラティブ・セラピーである（ガーゲン、2023）。これは、問題の原因を探るのではなく、なぜ問題が問題として存在するのかに視点を置く。セラピーとは、患者が前向きに生きられるように自分を語り直す「対話」である。医療従事者と患者がオープンかつ平等に「対話」ができれば、ケアは改善される。

このケアする側とケアされる側の関係に着目して、日本の介護現場で「対話」を実践する民俗学者がいる（六車、2015）。彼女は「驚き」と「発見」をキーワードに、介護施設において、利用者を対象に、2009年から今日に至るまで、少しずつ進化させながら、社会調査手法の一つである「聞き書き」を実施している（六車、2012、2023）。

「介護民俗学」は六車（p12, 2012）が提唱する試みで「介護現場は民俗学にとってどのような意味を持つのか」「民俗学は介護の現場で何ができるのか」という二つの研究課題の下、その可能性を模索している。

まず、一つ目の課題である「介護現場は、民俗学にとって、どんな意味があるのか」について、3年半の実戦の結果、彼女は、介護現場が、民俗学にとって、「宝庫」であることを発見する（六車、2012）。今は老いて、いわば社会から切り離された高齢者たちが、かつて生きてきた約1世紀弱の豊かな人生には、半ば歴史化している貴重な生き生きとした情報が山積みだったからだ。ここには、「忘れられた日本人が潜在している」とさえ述べている。身体能力が衰え、たとえ認知症を患っていたとしても、彼らの子供の頃から青年期の記憶は鮮明で、民俗学者である六車さえ知らなかったような想定外のテーマが隠されていた（ibid）。これらの記録を残すことは、失われていく民俗伝承の記憶と継承という民俗学の目的に貢献していると締めくくっている。

二つ目の課題「民俗学は介護の現場で何ができるのか」について、六車（2012）は、社会構造的考察をしている。介護の世界では、ケアする介護者と、ケアされる利用者という境界が引かれている。つまり、ケアを提供する側とされる側である。その「関係」は平等ではなく、従属的だ。しかし、聞き取りにおいては、その関係が逆転すると言う。情報を持っているのは利用者の方で、聞き取りする側は、情報提供を受ける側である。この行為により、利用者は自信と気丈さを取り戻した。彼女は、このような「関係」のダイナミズムが、ターミナル期を迎えた高齢者のウェルビーイングに貢献したのではないかと分析している（ibid）。

これらの点で、聞き書きという「対話」の可能性は無限大だと六車は述べている。「関係」の反転という点では、境界は存在している。しかし、介護者によるケアは継続するのだから、実際には「関係」が反転したわけではない。固定された優位劣位ではなく、一つの平等で開かれた「関係」への一歩だと解釈する方が適しているように思う。

この「関係」について、国際協力の分野でも、同じことが言えると思う。援助する側とされる側は境界で分断され、資金の流れによって、優劣が定まっている。それによって起こった障害を解決するため、参加型開発、被援助国のオーナーシップ、要請主義、援助協調など、さまざまな試みがなされているが、ケアだとか、援助資金だとか、一方側から流れる強力なものがある場合、境界をなくし分離を完全に回避することは、なかなか難しい。

5. 客観性について

主義主張は一貫しているガーゲンだが、最近の著書には「社会構成主義」というタームは見られなくなった。一方、様々な文体や事例の提示や、芸術作品とのコラボ等、いっそう多彩な理論展開の手法が用いられている（東村、2023）。ガーゲン（2004）本人は、学術的な論文は、退屈で平凡で無味乾燥で、面白くないと述べている。学問は、世界から切り離された、あるいは区切られた何かを極めるという、閉塞感を伴うものであると岡原（2014）は、伝統的な社会学を批判している。なぜなら、社会科学では、個人的な心の内の状態が全く関与しないことが、客観性を保つ秘訣だとされているからである（ガーゲン、2004）。場合によっては、「私」という表現を避けることすらある。

さらに、ガーゲン（2004）は、研究者が研究調査を行う場合、大抵の場合、研究者と被験者は引き離されていると指摘する。研究者は見えないところにいる。道徳的や政治的なものとは無縁な、価値中立性が求められるからだ。私も、大学院で、授業観察をする時は、家具になれと指導を受けた。社会調査は、実験室ではない。さまざまなものに左右される。しかし、その影響を極力コントロールするようにと学んだ。そのキーワードは、普遍的な可視化である。成果は、わかりやすいように、数値化することが求められた。教育の成果のような視覚化しにくいものも、指標化すること

に心を砕いてきた。バイアスを避けるために、研究者の感情や意見は、極力排除した。さらに、客観性の担保のために、被験者の言葉を受け取る際は、トライアングレーションで、何度も違う方法で再確認をした。

このような研究者の不在に対する批判を受けて生まれたのが、参加型の参与観察やアクションリサーチである。研究者は被験者や、現状をよくしようと試みる現場の実践者と協働する。また、エスノグラフィー、ライフヒストリー、ナラティブ・アナリシスなどの社会調査法も生まれた。だが、その分析法は、コーパスを使用したり、クラスター化やコード化をしたりという、客観化の手順が踏まれることがしばしばだ。

しかし、ガーゲン（2004）は、人間は常に「関係」のプロセスの中で決定されるのだから、何をしようとも、客観的な知識を持ち得ないと言う。例えば、実証実験は伝統の一つではあるが、絶対的なものではないと結論づけている。客観性を保つため、実証実験は、クールであること、状況の統制、数字への変換、正解を導き出すこと、実践から独立した事実を踏襲している。だが、科学的真実とは、客観的な観察などから生まれるものではなく、共同体の伝統の産物である。だから、科学は普遍的な真理を主張できない。従って、そもそも客観性や真理や科学などと言うものを証明することなど不可能であるという。

一方、感情は、研究にとって邪魔な存在ではなく、むしろ社会生活が感情的なのだから、感情抜きに社会を考えることに無理がある（岡原、2020）。人の心は事象を映す鏡であり、心が世界をありのままに映し出している。だから、それを反映していないものなど、価値はないと言う。意味が「関係」のプロセスから定まるのだから、言葉は現実をありのままに映しとるものではない。従って、価値中立的な言明など存在しない。何が科学的事実であるかは、それぞれのコミュニティによって決定するのだ。だから、我々は無意味な記号論から脱し、価値の再構築を目指す時だ（ガーゲン、2004）。

6. アートベース・リサーチ

脱記号、脱文字の一環として「アートベース・リサーチ」と呼ばれる、新しい実践がある。

岡原（2014）は、社会学が、ただ論文や書籍として放置されているだけならば、それは死物化されているだけで、「対話」は不可能であると断言している。必要なことは、今まで近代科学が禁じてきた、「パフォーマンス性」であると述べている。現実とは、身体性、共同性、現場性で成り立っており、そしてそれは社会的行為のリアルな姿であるとする。生きる力は、当たり前を疑い、他者と出会ってその体験に共感し、知識を相対化することで生まれると小倉（2014）は言う。生きられた経験との出会いは、自分を救わない、定式化かつ細分化された専門知ではなく、著者自身の生が描かれた自伝やドキュメンタリー、文学などの作品にあると。他者の生きられた経験こそ、知や学問の意味の基盤である。

慶應大学で開催されている「生と感情の社会学」の講義では、段階や役割などの抽象的あるいは集合的なカテゴリーで分離するのではなく、4つの段階を踏んで生成的営為が繰り返された（小倉、p27, 2014）。まず、そういったカテゴリーを背負いながら生きている人間の経験から理解する「生の全体性への接近による生成」、異質な経験と「異化し合い生成」、パフォーマンスによる表現を「追体験による生成」で、このプロセスを経て、「生きられた経験」にまでたどり着いた時、個や分類を超えて地続きとなる。ここにおいて、特定のカテゴリーに属するかどうかと言う個別の条件が

重要なのではなく、「当事者」の生きづらさや快樂というような体験に、他者がそれぞれの自分自身の経験を重ね合わせ（参与可能性）、その感情は自分ごと（当事者）として受け入れられる。そこから新たなコミュニケーションが開け、新たな社会的な再構築の契機となりうるとする。

岡原（2020）、実証主義的な近代科学へのアンチテーゼとして、2015年から「アートベース・リサーチ」や「アートベース社会学」を提案し、研究作業のプロセス全体や最終的な成果において、文字を主体とする小説や文学、そして文字を主体としない美術や音楽などの芸術を媒体とする研究スタイルを提唱している。アートは受容されるとき、理性的な批判意識と共に、「共感」的な関わりをもたらす。研究者が特権的に真理を主張するのではなく、多義性や多元性の下、物事の意味や解釈の生成プロセスが民主化される。そのため、発信者も受信者も、参加者みな平等な立場で、意味形成の「対話」に加わることになる。このような研究における知の生成において、創造的な芸術活動を組み込む「アートベース・リサーチ」については、「国際美術教育学会」を中心に、研究報告が多数されている（小松、2023）。

その起源を辿ると、1980年代にアメリカの教育学者アイスナーが「アートベース・リサーチ」と言うタームを生み出し、1993年のスタンフォード大学の教育イベントや、1997年にアメリカ教育学会が出版した「教育研究の現代的方法」第二版において言及されたのを契機に、「アートベース・リサーチ」と言う考え方が、教育研究の方法論の一つとして位置づけられた（小松、2023）。この新しい方法論の発展の過程において、研究成果を従来の論文とは異なる形で表すため、アートという非言語的な形式を用いた。これは、従来の量的研究とも質的研究とも異なる、第三の研究法である（ibid）。

では、データに基づかないで、どのようにして芸術で研究を表現するというのか。小松（2023）は、「アートベース・リサーチ」がアートを拠り所にすることが鍵であるとする。アートの性質は、人の感情に訴えるものなので、同じ作品を見ても様々に解釈される。だから、一人一人の経験の質に迫ることができるという。アートは、作者の個人的な感情と切り離されることがなく、科学が求める客観化や一般化とは真逆なので、見る者に対して、社会的世界の質を知覚させることが可能である。従って、この新しい概念の目的である、新たな世界の見方や、これまでは認識されなかった拡張領域に目を向けさせることができる。

それを「研究」と呼んでいいのかと言う批判に対して、小松（2023）は、客観的論証や反復可能性などの、伝統的な研究のあり方に対して、問題定義を投げかけているのだから、全く違う研究のやり方と言う意味で、新しい研究のあり方なのだと反論している。

従来の研究は、客観性を重視するが、研究に主観性を組み込むことが必要だと言う立場から、「一人称研究」「当事者研究」「オートエスノグラフィ」「アートグラフィ」「感情的社会学」など、多くの研究手法が開発されてきた（小松、2023）。主観的な「感情」を学問に昇華するために必要なことは、①自分の感情を感情的に探求②自分の感情を社会学的対象として観察③自分の感情がどのように感じられているのかに集中することであると岡原（1998）は述べている。

結局のところ、「アートベース・リサーチ」が研究なのかどうか、あるいは方法論なのかどうかは、さほど重要ではない。大切なことは、これまでとは違う社会において、これまでにはなかった、新たな研究の視座が開かれ、従来の研究概念ではカバーできなかったことに目を向けさせ、凝り固まった研究概念の拡張が実現するという目的が達成されることである（小松、2023）。その試みとして、アート表現に落とし込むことで、データや知見の提示に留まることを超越した「共感」を生み出そうとしているのである。

さらに、他者のライフに向き合うことが、他者の証人になり、それが「エンパワメント」を生

み出す。なぜなら、執筆者のほとんどが、対象の事象に対して、観察や分析をするだけではなく、実際に深く関与しているからである（岡原、2020）。そのプロセスは、従来とは違う風に物事を見て考え、さらに深く感じて、新しいことを学び、理解をすることを可能にする。

アート表現を使えば、自分自身の言葉で、自分自身が伝えたいことの本質に迫ることであるが可能になる。ある作品を鑑賞した者が、自分の「感情」が作者に「共感」することによって、自ずと研究に巻き込まれていく（小松、2023）。そして、既存の意味を手放し、目的や意味がわからないまま、世界と向き合い、自分自身の表現を生み出していくことが、「アートベース・リサーチ」の目指すものなのである（ibid）。

7. おわりに

「アートを使う社会学」を推進する岡原（p5, 2020）は、著書の中で、自身の言葉をこう締めくくっている。

アートと学問（科学）、どちらもやっていいんだと思っていただければ、嬉しいです。いや、やっていいだけではなく、一つのテーマがそうする事でより豊かでより面白くなると思ってもえたら、もっと最高ですね。

それは、冒頭で私が求めていた疑問、すなわち「社会科学の科学性や客観性と、対話や経験を主体にする極めて個人的な手法は両立するのだろうか」「学術の枠を超えて、芸術の形で、社会を寛容することなど可能なのだろうか」「そんな主観的な媒体によって、社会を科学することはできるのだろうか」に対する答えに深く関係する。

客観的な実証研究とアートのどちらが正しいのかと悩んでいる者にとって、アートと学問（科学）のどちらもやっていいんだと言われることは、救いである。これまでやってきた従来型の研究と、新しい試みの間で悩む必要がないからだ。完全にこれまでのやり方を否定されたとしたら、まるで自分のしてきたことが無意味なような気にもなる。

実際、現段階で、私はまだこの新しい考え方が、完全には腑に落ちていない。ただ、従来のやり方で行き詰まっていることは確かで、その問題に対応するために、従来のデータや知見の提示に留まらない、新しい研究領域が必要で、そのための新しい試みとしての、アートの利用には説得力がある。問題解決策として、アートの持つ性質やポテンシャルも、理解できる。なぜなら、先行文献に見られる、課題に立ち向かうためのキーワードは、「関係」「参加」「対話」「共感」「感情」「聞き取り」「驚き」「発見」「寄り添う」「エンパワーメント」で、アートがこれらをもたらす可能性があることが推測できるからだ。アートは見る者の感情を揺さぶり、深い関与を呼ぶだろうことがわかる。

しかし、この新しい主観的な概念と、従来の伝統的な客観性の追求は、自分にとって両者の距離がまだ遠く、かけ橋を見出せないでいる。目的や趣旨は理解できるが、実践においてどうすればいいのか、やり方への配慮が必要なのだろうと推測する。初心者の中には技能もなく、まだその感覚が掴めないでいるが、自分の研究に導入していくことにより、少しずつ経験値を増やししながら、自分なりの答えを見つけていきたいと考えている。

昨今のグローバル化の進行、IT革命による劇的な変化、脅かされつつある平和、深刻化する環境問題。世界はますます予測不可能になり、そのスピードは目を見張るほどだ。このような社会の急

激な変容に、新しい研究のあり方の模索は、ますます必要不可欠なものなのだろうと思う。今後も加速していく時代の変化に対応できるように、さらに経験を重ねて知識を深め、より深い議論を積み重ねていきたい。

参 考 文 献

- Gergen, K (2009) 'An Invitation to Social Construction' second edition, SAGE
- 大下由美、小川全夫、加茂陽編「ファミリー・ソーシャルワークの理論と技法：社会構成主義的観点から」九州大学出版会
- 岡原正幸 (2014) 「生と感情の社会学」岡原正幸編著『感情を生きる：パフォーマティブ社会学へ』慶應義塾大学三田哲学会叢書
- 岡原正幸 (2020) 「アートを使う：アートベース・リサーチ」岡原正幸編著『アート・ライフ・社会学：エンパワーするアートベース・リサーチ』晃洋書房
- 小倉康嗣 (2014) 「生きられた経験へ：社会学を「生きる」ために」岡原正幸編著『感情を生きる：パフォーマティブ社会学へ』慶應義塾大学三田哲学会叢書
- ガーゲン、J. K. (2004) 「あなたへの社会構成主義」東村知子訳、ナカニシヤ出版
- ガーゲン、J. K. (2020) 「関係から始まる：社会構成主義がひらく人間観」鮫島輝美、東村知子訳、ナカニシヤ出版
- ガーゲン、J. K. (2023) 「関係の世界へ：危機に瀕する私たちが生きのびる方法」東村知子、鮫島輝美、久保田賢一訳、ナカニシヤ出版
- 久保田賢一編著 (2021) 「途上国の学びを拓く：対話で生み出す教育開発の可能性」明石書店
- 小松佳代子 (2023) 「第一部：A B R の理論的展開」小松佳代子編著『アートベース・リサーチの可能性：政策・研究・教育をつなぐ』勁草書房
- 鈴木隆子 (2021) 「理科研究授業支援プロジェクトが生まれるまで：ザンビア」『久保田賢一編著「途上国の学びを拓く：対話で生み出す教育開発の可能性」明石書店
- 原百年 (2011) 「ナショナリズム論：社会構成主義的再考」有信堂
- 六車由実 (2012) 「驚きの介護民俗学」医学書院
- 六車由実 (2015) 「介護民俗学へようこそ」新潮社
- 六車由実 (2023) 「それでも私は介護の仕事が続けていく」KADOKAWA

Transition from Empirical Tradition to Arts-Based Research

Takako SUZUKI

Social research, particularly empirical studies are very common in the education field. I have been feeling, however, that our social research outcomes from universities were hardly reflected into the real practice. This fact makes me, as an academic, feel powerless and meaningless. Since some decades ago, some researchers have proposed alternative methods such as Social Construction, Narrative Therapy, Performative Sociology and Arts-Based Research. Gergen (2009) says that we do not need to know 'what there is' in order to understand the world, because the world is outcomes of relationship. Therefore, process of our own individual experience is crucial. Yes, it sounds right but isn't it too subjective? How can we make it science? What can we do with human bias? In order to answer these questions, this paper reviews related theories and discuss about describing process of individual experience and the science. After all, I could not find a concrete answer, but I identified keys to bring social change as follows: relationship, participation, conversation, sympathy, emotion, surprise, discovery, accompanying and empowerment. If it is so, I see the strong potential of the art and individual narrative stories to meet these key components, and eventually to lead to the social change.

Key Words: *Research Methods, Social Construction, Narrative Therapy, Performative Sociology, Arts-Based Research*